

# 里見美禰子 —女学生上がりの〈迷羊〉—

橋川俊樹

## はじめに

『三四郎』（1908年9月～12月、東京朝日・大阪朝日新聞連載）のヒロイン・里見美禰子を論ずるにあたり、彼女が女学校出身者で、周囲から〈結婚〉が取り沙汰される適齢期の未婚女性であることを確認しておきたい。夏目漱石は前年の『虞美人草』（1907）において、甲野藤尾、井上小夜子、宗近糸子という三人の適齢期女性を登場させ、〈結婚〉をめぐる物語を展開させたが、美禰子の場合は〈結婚〉が最重要のテーマであるかどうかは微妙である。というのも美禰子には、〈結婚しない〉という選択肢も有り得たように思われるからだ。

里見美禰子のモデルとして、漱石の弟子・森田草平と風変わりな心中未遂事件を起こした平塚明子（1886生。号らいてう、雷鳥）が挙げられることが多い。『三四郎』が連載される半年前の1908（明治41）年3月末にいわゆる塩原事件（煤煙事件）があり<sup>1</sup>、漱石は森田を事件直後からしばらくのあいだ自宅に居候させ、この時に明子について聞いている。また、森田の友人・生田長江を介して平塚家にふたりの結婚を打診して明子から拒絶されてもいる。らいてうの自伝<sup>2</sup>には、「これほど当事者を無視したものの考え方があろうか、男と女の問題とさえいえば、結婚ですべて解決すると思っている世間の有象無象と全く同じじゃないか」とある。彼女には以前から〈結婚〉願望というものがなく、自活の道を得るために速記術を身に付けていたという<sup>3</sup>。もし里見美禰子に平塚明子の影があるならば、このような、〈結婚〉を拒絶し独身生活を厭わない姿勢が美禰子の造型に影響したと考えることもできなくはないのである。

里見美禰子と平塚明子には、山手の本郷に住む富裕な家の令嬢である点、美禰子が小川三四郎と同じ年（数えて23歳、作品時間が連載時の1908年であれば1886年生れ）とすれば明子も同年齢になる点など、いくつかの共通項が見られる。しかし美禰子には、当時「禅学令嬢」と呼ばれたほど宗教的・哲学的な探究心が強く、深く自己を見極めようとする明子のように強烈な自意識や思想性は見られない。また、らいてうの自伝には一種の好奇心から若い禅僧に接吻してしまうような性衝動があったことが告白されていて<sup>4</sup>、〈性〉に対する好奇心や欲望に自覚的であったと思われるが、美禰子にそのような面は見られない。宗教・思想への傾倒、性欲の自覚という問題は、いずれも〈自我の覚醒〉の名のもとに当

時の青年・学生たちが抱えていた共通テーマである。平塚明子は女性であったがために、華嚴の滝で自死した一高生・藤村操（1886生）のような〈煩悶〉する男子学生たちと同列に語られることはなかったが、高等教育を受けた女学生として「自分とは何か」という命題を精神的・肉体的に問い詰めていった姿勢は、本質的に彼らと同じである。彼女はそれを塩原事件という一大スキャンダルとしてマスコミから取り上げられることで、青年男子が抱える苦悩は女学生や〈女学生上がり〉のインテリ女子にも起こることを結果的に証明してみせた。

平塚明子は、お茶の水の東京女子高等師範学校付属高等女学校から日白の日本女子大学校家政科に進んだ（1903～1906）、当時の女性として最高の学歴の持ち主である。卒業後も女子英学塾（現・津田塾大学）、成美女学校<sup>5</sup>などで英語に取り組んでいる。一方、里見美禰子は学歴が示されていない。しかし、少なくとも高等女学校以上の卒業生であることは、「ポーア」、「マーブル」、「ストレイ・シーブ」などの単語が自然に出てくる英語力からみて間違いなからう。英語はときどき広田先生のところに習いにいっているとされている。『虞美人草』では藤尾が文学士の小野を家庭教師に來させて英文学を習っていた。語学力は、女学生と〈女学生上がり〉の女性のもっとも顕著な特徴の一つであった。

美禰子が数えの23歳であるとして、らいてうと同じく女学校を出てまだ二年程度とするならば、男子の中学校に相当する高等女学校より上級の日本女子大学校のような〈女子専門学校〉<sup>6</sup>か、女学校の専攻科・研究科のようなところを修了したことになる。

美禰子の友人・野々宮よし子は現役の女学生だが、彼女も『それから』（1909）の三千代と同じく、田舎の高等女学校を卒業し、〈専門学校〉相当の女学校に通っていると考えた方が自然である。いずれにせよ、里見美禰子は〈女学生上がり〉であることに間違いあるまい。

そこで小論では、美禰子が〈女学生上がり〉であることの意味を問うとともに、結婚適齢期にある山手令嬢として周圀から花嫁候補と認識され、近い将来には〈結婚〉という未来しか残されていないように見える境遇のなかで、彼女が何を望み、何にためらい、そして何を決断したか、を考察したい<sup>7</sup>。それは平塚らいてうの影響にとどまらず、漱石が美禰子の造型に託したものを問うことでもある。

## （1）女学生上がり

本田和子は『女学生の系譜』（1990 青土社）の中で、「女学生ことば」についての考察の最後に次のように述べている。

しかも興味深いことに、「山の手」の若い女たちもまた、この「女学生ことば」の行使者であった。学園内のそれよりは、幾分薄められてはいたものの……。もう女学生

ではない若い女たちは、宙に揺れることばに愛着しつつ、宙吊りの自身を手放すまいとする。

このことが意味するのは、明治という時代が、衆の前に提示して見せた様々な国家的要請に対して、奇妙なまでに無縁な、浮遊する女たちの誕生に他ならない。

「宙吊りの自身を手放すまいとする」、「浮遊する女たちの誕生」。里見美禰子もおそらく、その一人である。

「書いても可くつて」(四)、「随分ね」(八)など、現役の女学生よし子と同じように美禰子も「女学生ことば」を駆使している。女学校を出ても未婚の若い女性には、帰属すべき社会や組織が存在しない。実家にいるだけの、〈結婚〉までのモラトリアム状態。だからといって彼女たちがみな早く結婚したいと願ったわけではなく、「宙吊り」のまま女学生らしく振舞う自分に愛着をもっていた者も少なからず存在した。女子高等教育の普及のおかげで、それ以前にはあり得なかった〈女学生上がり〉の未婚女性もつ独特の浮遊感、浮世離れした感覚。おそらくこれこそが、高い空を、遠くの雲をみつめて飽きない美禰子の感性の正体であろう。美禰子の英語好きも、研究心や社交のためのスキルなどではなく、女学校で覚えた勉強や趣味の延長と理解できる。

本田は「あとがき」の中で、女学生をこう規定している。

「女学校」が、明治という時代によって用意された、若い娘たちの近代化の装置であったとして、それは、極めて不完全な、地に足の着かない奇妙な制度であった。輝かしい未来への登龍門でもなく、かといって家郷に迎え入れられる余地もない、優れて中途半端な娘たちの「溜り場」……。

〈中略〉

社会は女学生に格別の期待も寄せず、それゆえに、彼女らは、自身の生を設計し得べくもない。実社会からも、日常生活からも遊離し、空中楼阁さながらに宙に浮いた閑い地で、夢を紡ぐしかない彼女たち……

つまり、美禰子のような〈女学生上がり〉の山手令嬢は、そのような女学生時代を引き延ばして生きていると言える。国家や社会が求めているのは、〈結婚〉して〈妻〉や〈母〉になることだと頭では理解しつつ、感情においては〈結婚〉前の奇妙な空白状態に馴染んでいる自分を愛おしむ。それは、国家や社会が何の期待もかけていない、単体としての〈若い女性〉として生きることに他ならない。言い換えれば、当時の一般女性の人生では得られにくい、一人の人間として、〈自分らしい自分〉として生きることでもある。

しかし当時のジャーナリズム（すなわち世間）のほとんどは、1900（明治33）年頃からの女学校の増加にともない、急激に目立ってきた「女学生」や「女学生上がり」の若い女

性を、彼女たち特有の心情に顧みることなく、あざけり、罵倒していた。

ジャーナリズムの女学生罵倒には二つのベクトルがある。一つは、いわゆる「墮落女学生」に対する非難である。これは主に地方から上京した女学生で、親の目が行き届かないのをさいわい、流行の「自由恋愛」（当時の感覚では、肉体関係を辞さない恋愛行為。「自然主義」とも呼ばれる）に身を任せ、あるいは不良学生などにだまされ、時には妊娠・墮胎という事態にまで発展するパターンである。田山花袋の『蒲団』（1907）には自分をこの種の「墮落女学生」と規定したヒロインが登場するが、この傾向の女学生小説の代表といえれば小杉天外『魔風恋風』（1903）と小栗風葉『青春』（1905～1906）であろう<sup>8</sup>。

その風葉が『青春』の腹案当時、「他より伝聞せし実話を少しく手加減して書流した」<sup>9</sup>という小説に、その名も『女学生』（1906 春陽堂）というのがある。内容はまさにこのパターンの女学生小説である。

岸江という卒業間近の女学生が、「千駄木倶楽部」という不良グループの巣窟に騙されて連れこまれ、犯されたあげく、それをネタに金銭まで要求される。仕方なくすべてを恋人に打ち明けると、口では同情的なことを言いながら、彼女が汚されたことに堪えられなくなった彼から岸江は捨てられる。絶望した彼女は自殺をはかり、一命はとりとめたものの岸江の一家は逃げるように町を去る、というストーリーである。

終始悪いのは、あさはかにも騙されて肉体を汚された女学生であるかのように物語は展開し、彼女には何の救いも用意されていない。奇妙なのは、恋人の男が不良グループをほとんど非難していない点である。『青春』の関欽哉にも通じる身勝手な男の感覚が露骨に表れた作品であり、「墮落女学生」の墮落はすべて女学生自身の責任のみが問われている。実際、恋愛や性からんだ事件では『魔風恋風』や塩原事件のように、小説においても現実においても女性の方がより多く非難される。

ジャーナリズムのもう一つの非難対象は、女学校卒の学歴を鼻にかけ、知識や学力を自慢し、自分を高く見積もって、〈結婚〉に関してもそういう自分に見合った学歴・地位の持ち主でなければいやだ、と訴えるタイプ。特に語学力に自信を持ち、おとなしく家庭に入り「良妻賢母」たろうとはしない女性たちである。こういうタイプの女学生と〈女学生上がり〉に対しては、「高慢」、「ハイカラ」、「わがまま」、「生意気」などの評語のもとに、容赦ない非難が浴びせられる。

女学生上りの名が異様に聞えて、動もすれば人に忌憚せらる如き傾向の存するは、多くは女学生が余りに自ら高く持して、唯学問をなせば可なりとするが如き風あるが故にあらざるなし、女学生はよろしく妻学、母学をも力を極めて学ぶところなかるべからず。

（佐藤竹藏『女学生』（1901 南風館））

或は學問に技芸に偏し婦徳を欠けるが如き教育は目今女子教育の弊であつて女学校卒業生は或意味に於て良妻賢母でない、我国今日の実情では女子に高等専門教育を授けるより寧ろ一家の主婦たるに適する家庭的國民的の女子を養成するがよいのである。

(太田英隆『男女学校評判記』〈1909 明治教育会〉)

女学生の多くは、自己の学色を鼻にかけて高ぶり、「妾の良人たるべきものは、大臣宰相か、<sup>はたまた</sup>将又博士か金満家に非ざれば、その資格なし」など、大風呂敷をひろげ〈以下略〉

(洞口北涯『女学生反省録』〈1909 海文社〉)

以上は一部の例にすぎず、ほかにも学歴と学力のある女性が増えると〈結婚〉に支障をきたすという内容の議論は数多い。『虞美人草』の藤尾がこのタイプで、彼女は嫁にはいかずに博士になる小野を婿に迎えようとする。

『三四郎』の美禰子やよし子は学歴や教養をひけらかすような浅薄なタイプではない。しかし美禰子は、広田と原口から「あの女は自分の行きたい所でなくつちや行きつこない。勧めたつて駄目だ。好きな人がある迄独身で置くがいい」、「全く西洋流だね。尤もこれからの女はみんな左うなるんだから、それも可からう」(七)とされている。

よし子の場合も、兄が勧める縁談を「能くつてよ。知らないわ」(九)という女学生ことばで突っぱねる場面がある。よし子は、「だって仕方がないぢや、ありませんか。知りもしない人の所へ、行くか行かないかつて、聞いたつて。好<sup>すき</sup>でも嫌<sup>うらひ</sup>でもないんだから、何にも云ひ様はありやしないわ。だから知らないわ」(九)と弁明している。

しかし、明治女学校の経営にも携わっていた評論家の青柳有美は次のように言う。

世間の小生意気な女学生なぞのうちには、亭主にする男を択り好みして、あの男では到底愛が起らん、永く交際をした上で無ければ、気が知れ無いから、一回や二回の見合位では、嫁に行く気にはなれぬのと、小マシャクレたことを仰<sup>おほせ</sup>になる輩もあるやうに見受けられるが、是れは実に以ての外の所存で……〈中略〉……「自由結婚」なぞといふことは、決して賞むべきものでも、又奨励すべき筈のものでも無い。思慮ある父兄や師友が充分に詮衡してくれた男を、一議なく良人と崇むるのが、何より策の得た上分別で、是れが女子に取り、最も安全にして、而も最も幸福なる結婚の道である。

(青柳有美『女学生生理』〈1909 丸山舎書籍部〉)

青柳からすれば、よし子の弁明は「小生意気な女学生」らしい「小マシャクレた」言いぐさに過ぎない。

女学校での学力を誇り、親の勧める相手に物足りず、洋行帰りの文学者に憧れを抱く、このタイプの典型的な「女学生」を主人公にした小説に、大塚楠緒子『露』（1908年8月明文堂）がある<sup>10</sup>。この小説の刊行前、楠緒子は漱石の推薦で東京朝日新聞に『空薫』（4月～5月）を連載していた<sup>11</sup>。

この『露』のヒロインと『三四郎』の美禰子・よし子を比較することは、美禰子に平塚らいてうの影響を考える上でも重要と思われる。

## (2) 「生意気」な女学生

『露』のヒロイン・田住鈴音は、日本橋にある大きな乾物問屋の「秘蔵の一人娘」である。彼女は「女子大学院」でも評判の美人である上に、卒業の成績もクラスの首席で、親が店の跡取りと婿養子に決めている慶作という無学の店員のことを、自分に釣り合わないとして嫌っている。代わりに、洋行帰りの文学者・神坂登美郎に憧れを抱いている。鈴音は卒業して実家に戻るはずのところを親にわがままを言って「研究科」に残り、いまだに女学校の寄宿舎にいる。そこの舎監・玉木寿代から意見される場面が興味深い。

玉木は、〈学問〉を活用することは「教師に成つたり、書物を著はしたり、又会を起したり、何も其様な事を為るのではありません」と言い、「なにしろ家庭の事に携はるのは、女の天職を全うするといふものです、貴君等のやうに学問をした女がどどん世の中へ出て家庭を作れば立派な家庭が出来る、立派な家庭を沢山作らうがために貴女方を教育するといふのが校長さんの重きを置かれてゐる点です」と説諭する。また、「貴女の学問は、貴女自身に少しばかりの光を付けて居るに過ぎないが、大きいお店の取引を毎日締つて行かれるその方は、何れ程の仕事を毎日為てゐられるでせう」と、慶作を弁護する。玉木の心中には、鈴音は「今の、高等教育を受けた女学生」にありがちの、「家庭に入ることを詰らぬもの、やうに思ひ倣して、生意気な独身論なんぞを立て、居るのではないか」という疑いがある。平塚明子のような女学校卒業者の独身主義は塩原事件以前から警戒されていたのである。

ここにあるのは典型的な「良妻賢母」論である。成田龍一の説明によれば、「『良妻賢母』とは女性たちを『妻』として私的な領域である家族にとどめおくとともに、将来の国民を生み育てる『母』としての献身的な営みを通じて、国家(公)に連結し統合するという近代社会の規範」である<sup>12</sup>。

しかし一方で、斎藤美奈子が『モダンガール論』で指摘しているように、女学校が「良妻賢母」を建て前としていればこそ、娘は親の許可を得て高等女学校以上の教育を受けることができた<sup>13</sup>。

女の子とはいえば、将来はどうせ嫁にいくのに学問なんか必要ない、と考えるのが

明治のふつうの親である。しかし、もし嫁に行くために学問が必要だったらどうだろう。公(国)の方針とも合致していたらどうだろう。父母がつべこべぬかしたら、「お父さま、これからの婦人は、女学校くらい出ていなければ、お嫁のもらい手もなくてよ」とでも切り返してやればよいのである。

(第1章「将来の夢、みつけた」)

親からすると娘の高等教育は上品な嫁入り道具をつけてやる感覚であっただろう。けれども娘が受けるのは、男子に比べれば不十分とはいえ、れっきとした〈学問〉である。特に語学はこの当時から男女差があまりないジャンルであり、漱石も『それから』の園遊会の場面で英語を巧みに操る令嬢の姿を描いている。津田梅子の女子英学塾などは、英語教育に特化し、卒業生の多くは英語教師になっている。

平塚らいてうは、まさしく良妻賢母教育そのもののお茶の水高女では飽き足らず、親に日本女子大学校への進学を望み、希望の英文科ではなく家政科に変更させられたが、入学後は積極的に他学科の講義を聴き、図書館で本を読み、〈学問〉に没頭している。

『露』の「女子大学院」という女学校は巣鴨にあり、楠緒子が夫・大塚保治の洋行中に英語の勉強に通った明治女学校と同じ場所に設定されている<sup>14</sup>。野上弥生子(1885生)は1906年にここの「研究科」を卒業している。学校のネーミングはおそらく、日本女子大学校の通称「女子大学」と、矢島楫子の「女子学院」を合わせたものだろう。

女学校を首席で卒業、語学力は男をしのぐ女学生に、乾物問屋の店を継ぐ男のかみさんになれと言っても当人は容易に納得しないのは自然だろう。とはいっても鈴音には、独身主義はもちろん、英語教師になったり、〈学問〉を進めて著作を世に問うというような発想は全くない。「研究科」に進んだのは嫌な〈結婚〉を先延ばしにするためであり、彼女の甘い希望は科外講師の文学者との〈結婚〉である。彼との〈結婚〉ならば自分の学歴や学力が意味を持つと考えるからだ。

『露』の物語の結末は、そんな鈴音に幻滅をもたらす。洋行帰りの文学者には訳ありの愛人がいることがわかり失望するのだ。また、鈴音には檜森<sup>ひもりしずこ</sup>鎮子という親友がいるが、生活難と孤独のために鎮子は最後に轢死を遂げてしまう。

その朝、遠からぬ板橋から王子へ続いて居る鉄道線路の側<sup>わが</sup>に見るも無惨な鎮子の亡骸を見た時は、あまりの浅ましさに、鈴音は、気を失なうて、寿代の腕に倒れか、つたので有つた。

激しいショックを受けた鈴音は、貧しさと孤独を遠ざけるためにも、<sup>が</sup>我を捨てて慶作と〈結婚〉する道を選んで終わる。若い女性の轢死ということでは『三四郎』にも同じ挿話があり、影響関係を考えたくなるが、三四郎の「命の根」を揺るがすような轢死直前の女の

眩きはここにはない<sup>15</sup>。鎮子の場合は、鈴音と同じように〈結婚〉への甘い期待が破れたことが自殺の主な原因になっている。

『露』という作品世界では、〈結婚〉が女性にとって唯一絶対の価値とされている。楠緒子は『空薫』においても〈結婚〉という手段を使って自分の出世欲の満足を得ようとする高学歴のヒロインを造型している<sup>16</sup>が、〈結婚〉そのものを疑ったり、あるいは〈結婚〉をすることもできないような生活難などは、この「奥様」然とした閨秀作家には想像もできなかったに違いない。

平塚明子が自己省察の結果、〈結婚〉を考えず（のちに籍を入れない〈事実婚〉はするが）、自活の道を志して速記術を学んだことは先に述べたが、事実としては定収入といえるものを持ってなかった彼女は、実家に居るときはもちろん家を出てからも実家の経済に依存することが多かった。主に母親を頼ったようだが、無理解な父親からも黙認されていたようだ。鈴音のように大きな商家の一人娘であったならば、そうはいかなかったであろう。

塩原事件ののち自分のなすべきことを探していた明子は、1911年に生田長江の助言のもとに日本女子大学校卒業生を中心に文芸雑誌を創刊、〈女ばかりで雑誌を作る〉という快挙を達成し、再び世間にセンセーションを巻き起こした。その後も彼女の生涯を貫いたテーマは、男性や世間からの女性の〈自立〉であったと言えよう。彼女が男性従属的な〈結婚〉や「良妻賢母」思想から自由で居られたのは、鈴音のような〈結婚〉への甘い願望や経済的必要性がなかったことと、〈家〉や国家よりも、一人の女性、一個人としての「自分」を尊重し、それに執着したからである。

では、里見美禰子の場合はどうなのか。彼女は結果として〈結婚〉を選択するが、その前に、〈女学生上がり〉の山手令嬢としての美禰子について見ておきたい。

### (3) 「生意気」と「乱暴」

里見美禰子には、親がない。放任主義らしい兄がひとり居るだけである。うるさく〈結婚〉を勧める親がない代わりに、いつまでも独身で実家に居られるかどうかは兄次第という不安定な境遇にいる。明治の民法においては、男の当主が健在の〈家〉にいる女子の権利は無きに等しい。すべては当主次第である。美禰子は自由にできる自分名義の預金を持っているが、これは兄が妹の処遇に寛大な人物であることを示している。この兄が妹に〈結婚〉を勧めていたかどうかは分からないが、強要したことはないであろう。広田も原口も、与次郎も野々宮も、美禰子は〈自分のしたようにする女〉だという認識では一致しているように見える。そうさせているのは兄の恭助ということになる。

世間に構わず、気ままに振舞っているように見える山手令嬢の美禰子だが、ただ一度、世間の評価を気にしていることを露見させる場面がある。



「迷子の英訳を知つて入らして」

三四郎は知るとも、知らぬとも云ひ得ぬ程に、此問を予期してゐなかつた。

「教へて上げませうか」

「え、」

「<sup>ストレイシープ</sup>迷える子——解つて？」

三四郎は斯う云ふ場合になると挨拶に困る男である。

〈中略〉

<sup>ストレイシープ</sup>迷える子という言葉は<sup>わかっ</sup>解た様でもある。又解らない様でもある。解る解らないは此言葉の意味よりも、寧ろ此言葉を使つた女の意である。三四郎はいたづらに女の顔を眺めて黙つてゐた。すると女は急に真面目になつた。

「私そんなに生意気に見えますか」

其調子には弁解の心持がある。三四郎は意外の感に打たれた。今迄は霧の中にゐた。霧が晴れ、ば好いと思つてゐた。此言葉で霧が晴た。明瞭な女が出て来た。晴たのが恨めしい気がする。

(五)

先に掲げたように、女学生と女学校卒業者に対してジャーナリズムは(つまり世間は)、しばしば「生意気」という言葉で非難した。それは自らの学力を誇つて、男を見下すような態度に対する非難である。当時は男でも高等学校や専門学校あるいは私立大学卒業並み以上の高学歴者は少なく、それにもまして〈女子専門学校〉以上の高学歴女性は少なかった。1911年にらいてう等によって『青鞥』が創刊されたとき、マスコミがこぞってパッシングに走つたのは、ジャーナリストの男性たちが青鞥グループの女性たちの高学歴に脅威と反感を抱いたためでもある。——「良妻賢母」が真に女性最大の美德であるならば、女性には学校教育も学問も必要はない——。田辺花園の『蕨の鷺』(1888)の頃より昭和に至るまで、大真面目にそういう議論が蒸し返されてきた歴史には、女性が男性以上の力をもつことへの恐怖が潜在していた<sup>17</sup>。世間一般においても、学歴・学力が高い女性はプライドが高く、「生意気」で扱いにくいという評価は自明のものだった<sup>18</sup>。

この場面で美禰子は、三四郎の沈黙を〈女が生意気なことを言う〉という非難と解釈した。美禰子は「迷子」の英訳を聖書のことばで表現した、というより「ストレイ・シープ」という音の響きと喚起される絵画的イメージで何事かを伝えようとしたのだろう。それを語学力と知識のひけらかしと三四郎に受け取られたと思つたのである。

小川三四郎という青年の不思議な特徴は、当時の男性の通弊といえる、根拠のない女性蔑視的な発想が微塵も見られないことにある。そのことは美禰子に対してよりも、女学生によし子に対する「敬愛の念」(五)などに顕著である。この時も三四郎は「生意気」と少しも考えていなかった。彼は「ボーア」(襟巻)という単語を女から教えられても屈辱とは感じない、愚直過ぎるくらい素朴な男に設定されている。

齋藤美奈子はあるコラムで、『三四郎』は『電車男』（2004）に似ていると書いた。「からかっているのか本気なのか、姉さんぶった都会のギャルと、人並みの欲望はあるが経験不足で気のきいたことが何もできない純情ボーイのお話だから」という<sup>19</sup>。

美禰子が三四郎に対して「本気」だったかどうかは最後まで分からないが、確かに言えることは三四郎という「純情ボーイ」は世間の男のように美禰子を〈生意気な女〉扱いはしない、ということだ。広田が「あの女は落ち付いて居て、乱暴だ」、「イブセンの女は露骨だが、あの女は心が乱暴だ」（六）と言うとき、おとなしくない、女らしくないという評価が混じっていることは疑いない。野々宮宗八と「空中飛行器」（五）について議論している美禰子も、男に対して決して引き下がらない姿勢を見せている。これも世間的に見れば、十分に「生意気」な態度である。よし子が一見「乱暴」に見えてそうではないのは、男に対抗しようとはせず、人に甘える態度があるからである。美禰子は人に甘えない。ということとは、いつも他人と距離を置いて対峙し、事あれば闘う準備ができていて、ということである。

この「迷子」の場面のあとで美禰子が三四郎に送った絵葉書（二匹の羊と悪魔の絵）については、これまでにさまざまな解釈がなされてきたけれども、以上に述べてきたような観点からここで解釈してみると次のようになる。

まず、「悪魔＝デヴィル」は〈世間〉である。悪魔の源は、親しげに並んで座っている若いカップルに対する中年男の世間道徳的・感情的な憎悪であり、すなわち俗世間の〈眼〉である。二匹の羊は「迷羊」、すなわち「迷子」のことだが、「迷子」は帰属する場所をもたず、俗世間の〈眼〉にさらされながら生きる人間を指しているだろう。美禰子は帰属先を持たない女学生上がりの未婚女性であり、三四郎の場合は、帰属すべき大学にも都会にもまだ入りきれずに彷徨っている青年である。二人とも現代社会の中で帰るべき場所を持っていない「迷子」である。これを美禰子の三四郎に対するメッセージとして読めば、「あなたも私も帰属すべき場所が分からない迷子のようなもので、ただいたずらに世間の眼にさらされながら生きているのですね」、という意味になろうか。

確かなことは、この絵葉書に込められたものが美禰子の三四郎への〈共感〉であることだろう。彼女は三四郎の中に自分と同じ〈あるもの〉を見出し、興味を抱いたと思われる。「迷子」の場面で、もし三四郎が少しでも美禰子を「生意気」と感じていたら、それを見抜かれてそのあとの展開はなかったに違いない。三四郎が世間から遠い「純情ボーイ」だったからこそ、美禰子は安心して二人の相似を「迷える子」という〈謎〉<sup>ミステリアス</sup>にかけることができた。

そしておそらく、その〈謎〉の効果によって三四郎は早急に自分のもとに近づいてくるものと美禰子は予期していただろう。しかし純情でノロマな彼は返事をなかなかくれなかった。その後、与次郎の媒介で金を貸すことになるのだが、このとき自分の家へ三四郎を呼び寄せた美禰子には、明らかな計画があったと考えられる。

余所行き姿で迎えた美禰子は「とうとう入らした」(八)と三四郎に言い、さらに「あなたは索引の付いてある人の心さへ中<sup>あて</sup>で見様となさらない呑気な方だのに」と、恨み言を述べる。これを単純に考えれば、早く来て欲しかったのに何故それがわからないのです、という意味になる。しかし会話を交わすうちに、馬券を買って金を失くしたのは佐々木与次郎だと分かる。与次郎は美禰子に三四郎が金を失くして困っているから助けてやってくれ、とでも言ったのだろう。だから三四郎を迎えた美禰子は、はじめから貸主としての優位を占めたまま応対するつもりだったのが、この行き違いによりその優位を維持できなくなる。二人の間には微妙な空気が流れ、そのあと突然、美禰子は出かけると言い出す。おそらく美禰子が余所行き姿で三四郎と対していたのは、原口の丹青会の美術展に誘い出すつもりだったのだと思われる。当てが外れてとりあえず外出することにした結果、一緒に出た三四郎が自分に付いてくる形になったので、美禰子は予定通り、銀行で三四郎に金を貸し、展覧会に向かうことができたのである。

広田の引っ越しの日に二人が熱心に眺めたのは画集の「マーメイド」の絵だった。おそらく美禰子は三四郎と一緒に絵を見に行きたかったのだが、野々宮に芝居へ連れていってくれというのと同じ調子では頼めない。付き合いも浅く、年上の男ではないからである。そこで金の貸し借りをいい機会に連れを頼もうとしたのだろう。それは、「招待券を二枚貰ったんですけども、つい閑がなかつたものだから、まだ行かずにゐたんですが行つてみませうか」という言葉に表れている。言い換えれば、美禰子はデートのセッティングをしていたのである。

美禰子が三四郎に期待したのは、このような形で美術展や音楽会などに誘ってくれたり、どこか静かな場所で英語や文学の話をしたりすることであつたらう。しかし三四郎には気のきいた場所にエスコートする才はなく、「西洋の文芸を研究する者」(六)でありながら、異性と語らうような文学的ロマンティシズムに欠けている。それは知ったかぶりのペダントイズムに陥らない誠実な長所とも言えるが、異性に夢や憧憬を抱かせるものではない。「サッフォー」について雄弁に語る『露』の神坂登美郎とは真逆である。

『露』には、神坂博士が「女性と文学」と題する講演の中で女詩人サッフォーを取り上げ、「恋の神秘」や「失恋の悲惨」を説き、女学生たちを感動させる場面がある。

終にロイカデアの巖頭から身を千尋の激浪の中に投げ入れた女詩人の憐れな物語を語り終つた時は、糸程細い笹の巻葉に堪へず慄く露のやうに、妙齡の優しい処女の胸は震へて、講堂を出た時はみんな涙に顔を濡らして居た。

いささか大げさではあるが、このようにセンチメンタルな文学趣味や恋愛趣味があることは〈女学生〉の大きな特徴の一つである<sup>20</sup>。『三四郎』にも運動会の場面で、女学生のよし子が「サッフォーでも飛び込みさうな所ぢやありませんか」(六)と言うところがあるが、

これは文学趣味を表したものとはいえない。よし子のようなタイプには文学趣味が似合いそうにはない。美禰子の場合には、「飛行器」の議論の場面で野々宮・広田から「詩人」と言われている。日常や現実から離れた気高さやロマンを追い求める傾向があるからだろう。また、英語好きと絵画嗜好に女学生趣味の一端がうかがえる。

三四郎のような男にはこのような女学生趣味は分からない。野々宮が贈っていた「蟬の羽根の様なりボン」(二)と似たようなものを自分もお礼に贈ろうか、などと思いつきもしない。三四郎が野々宮より有利なのは年齢と趣味の類似であるのに、彼はその長所を發揮するため積極的に会いに行き、話をして親交を深めようとはしない。美禰子が三四郎に望んでいたのは、二人きりでの会話や鑑賞であったろう。それは必ずしも三四郎が〈恋愛〉対象であったことを意味しない。まだ同好の異性の友人くらいの感覚であっただろう。

「生意気」と評される〈女学生上がり〉の令嬢・美禰子は、鈴音のように〈恋愛〉や〈結婚〉に甘い期待を寄せているようには見えないが、らいてうのように独身を覚悟した上で〈自立〉を求めて生きているようにも見えない。やはり美禰子は、本田和子が指摘した『山の手』の若い女たちと同じように、女学生気分をひきずったまま、日常生活や現実から奇妙に浮き上がった自分を困惑しながらも愛おしんでいるように見える。

#### (4) 美禰子の〈結婚〉

里見美禰子が男性にもっとも期待していたことは、将来の〈結婚〉相手としての〈自分〉ではなく、今現在の〈自分〉をいつも〈見ていてくれる〉ことではなかっただろうか。

美禰子には意中の男性から〈見られていたい〉という意識が強くあったように思われる。

「一人と思つて入らしたの」

「え、」と云つて、呆<sup>ぼん</sup>やりしてゐる。やがて二人が顔を見合した。さうして一度に笑ひ出した。美禰子は、驚いた様に、わざと大きな眼をして、しかも一段と調子を落した小声になつて、

「随分ね」と云ひながら、一間ばかり、ずんずん先へ行つて仕舞つた。三四郎は立ち留つた儘、もう一遍ヴェニスの掘割を眺め出した。先へ<sup>まげ</sup>抜た女は、此時振返つた。三四郎は自分の方を見てゐない。女は先へ行く足をびたりと留めた。<sup>ちか</sup>向から三四郎の横顔を熟視してゐた。

(八)

このシーンは、第5章の団子坂の菊人形見物の場面と呼応している。

よし子は余念なく眺めてゐる。広田先生と野々宮はしきりに話を始めた。菊の培養法が違ふとか何とかいふ所で、三四郎は、外の見物に隔てられて、一間ばかり離れた。

美禰子はもう三四郎より先にゐる。見物は概して町家の者である。教育のありさうなものは極めて少い。美禰子は其間に立つて、振り返つた。首を延ばして、野々宮のゐる方を見た。野々宮は右の手を竹の手欄てすりから出して、菊の根を指しながら、何か熱心に説明してゐる。美禰子は又向をむいた。見物に押されて、さつさと出口の方へ行く。

美禰子は、野々宮から〈見られていない〉ことに傷ついている。この時の美禰子の眸ひとみに宿った「霊の疲れ」、「肉の弛みゆるみ」、「苦痛に近き訴へ」を含んだ「不可思議なある意味」には、野々宮が自分を見ていてくれないことへの失望や恨み、寂しさなどの感情があったと思われる。それが気分や体調に影響し、三四郎と連れ立って歩く結果になった。

この場面の野々宮とは違い、展覧会の場面の三四郎は、ヴェニスの絵を兄妹の画家が描いた<sup>21</sup>という指摘を確かめるためにちょっと美禰子から目を離したに過ぎないが、美禰子はどんなときでも一緒の男から〈見られていたい〉のである。そしておそらく、菊人形の前で傷ついた自分をもてあましていたとき、気にして〈自分〉を見ていてくれていた三四郎に、初めて〈恋愛〉に似たものを意識したことだろう。

あくまで推測になるが、美禰子にとっての三四郎は運命的な〈目撃者〉であつただろう。三四郎と初めて出会った大学の池の場面で、団扇を翳して遠くを見ていた自分の姿を〈絵〉として残しておきたいと思うほど気にいった美禰子は、その記念すべき姿を〈偶然〉に共有した〈目撃者〉として三四郎を記憶した<sup>22</sup>。第二の大学病院での出会いの時も、広田の引越し先で出会ったときも、自分にとって後々まで記念すべきポーズの〈偶然の目撃者〉として意識したことだろう。三度目に親しく口をきいたとき、その〈偶然〉が〈運命〉となる予感があつたかもしれない。そして菊人形見物以後、「迷羊」としての〈共感〉がそこに加わつたと考えられる。

「夫それから、あなたの肖像を描くとか云つてゐました。本当ですか」

「え、高等モデルなの」と云つた。男は是より以上に気の利いたことが云へない性質たである。それで黙つて仕舞つた。女は何とか云つて貰ひたかつたらしい。

このとき三四郎は、すでに原口から「団扇を翳して、木立を後に、明るい方を向いてゐる所」を描くということを知っていた。なぜ美禰子はそのポーズを選んだのか不思議に思ったはずだが、その疑問をぶつける機会をここで自らつぶしている。展覧会に誘ひ出した美禰子は尋ねてもらいたかつたに違いない。二匹の羊の絵葉書を見て、「迷へる子のなかには美禰子のみではない、自分ももとより這入つてゐたのである。それが美禰子の思はくであつたと見える」とまでは理解して、その奥にある、親交の機会を求める美禰子の意図に気付かなかつたのと同じである。

美禰子の三四郎に対する思いの中心は、池の場面でも「迷子」の場面でも〈共感〉であ

る。〈偶然〉に対して〈運命〉的なものを感じるシンパシーだと説明できよう。これは〈恋愛〉の萌芽というべきもので、〈結婚〉対象としてふさわしい野々宮への思いとは全く異なる性質のものである。

三四郎と違って、年齢・地位・人格どれをとっても〈結婚〉相手として申し分のない野々宮に対しては、美禰子は〈恋愛〉モードを要求していたように思える。兄の友人で昔からの知り合いであるこの二人には〈恋愛〉要素が足りない。「蝉の羽根」のようなりponは、美禰子のそういう欲求に野々宮が応えたものだろう。しかし、学者として忙しい野々宮には美禰子という時間が少ない。たまに一緒のときでも、野々宮が美禰子ばかりを気にして〈見ている〉ということはほとんどない。野々宮には美禰子の存在よりも明らかに大事な、実験や研究がある。それは美禰子が野々宮と〈結婚〉してもおそらくは変わらない。だとすると結婚後の美禰子は、学者の夫をサポートする「良妻」たらざるを得なくなるだろう。

逆に三四郎を相手とした場合は、〈恋愛〉要素のみ、ということになる。年齢も身分も性格も、今すぐの〈結婚〉相手としては物足りない。けれども〈恋愛〉への発展要素は濃厚にある。〈恋愛〉から〈結婚〉への道筋も見えないわけではない。問題は時間である。美禰子はその発展をじっくり待てるのか、また周囲の状況がそれを許すのかにかかっているといえよう。

里見美禰子の場合、女性の〈結婚〉問題を大きく左右する〈家〉や家族について、第5章でよし子が三四郎に説明している以上のことはほとんど分からない。邸宅は本郷真砂町にあり、両親は早くに亡くなっていて、亡き父の職業や身分は分からない。恭助という法学士の兄がひとり居て、兄は野々宮の友人で、画家の原口とも仲がいいらしいが、作品に登場することはない。この兄が職に就いているのかもはっきりしない。『虞美人草』の甲野欽吾と同じく、いわゆる〈高等遊民〉である可能性はある。甲野の父は外交官であったが、邸宅や財産がその俸給で出来たものかは判断できず、もとの〈家〉の財産であった可能性も高い。里見家もこの甲野家と同じような設定と考えていいのかもしれない。ほかに広田の友人だった兄が居たが、亡くなっている。これも経歴はまったく分からない。

試みに、これを平塚明子と比べてみると、平塚家は本郷駒込曙町にあり、両親ともに健在で、父は会計検査院の高級官吏である。姉がひとり居て、姉も日本女子大学校国文科に入学している。明子の学歴は前述したが、美禰子との大きな違いの一つは、同級・同窓の友人がいて、禪への傾倒も、雑誌の創刊も友人の影響と協力が大きいことである。また、美禰子には明子のもつような人生上の明確な姿勢や方針がない。したがって、美禰子は〈家〉や家族に反抗してまで〈自立〉を求めるタイプではなく、〈家〉には兄がひとり、仲がいい友人はよし子ひとりという、寂しい境遇にある。

当時の漱石の周囲にいた、美禰子や明子と同じく本郷の山手令嬢といえる存在に、1908年夏から漱石の通い弟子だった物集芳子（1886生）・和子（1888生）の姉妹がいる。1911

年に明子が『青鞥』を創刊するにあたり、声をかけたのは同窓の芳子の方だったが、芳子は外交官との結婚が決まっていたので妹を推薦した。森まゆみの『断髪のマダンガール』には次のようにある<sup>23</sup>。

「青鞥」発刊の年、物集和子は二十三歳。跡見高女を出てまだ実家にいた。当時としては珍しい。良家の令嬢はたいい女学校時代に縁談がすすむものだが、実母は早く亡くなり、継母は下の子どもの世話に明け暮れていたし、父（筆者注一国文学者・物集高見）は助手たちと『広文庫』の研究一筋だった。

物集姉妹は兄・高量<sup>たかかず</sup>の影響で小説を志し、二葉亭四迷の弟子となったが、二葉亭が1908年6月末に東京朝日新聞の特派員としてロシアに向けて出発したとき同僚の夏目漱石に預けられた。ちょうど『三四郎』執筆前である。面会日の木曜の午前中に二人は千駄木の邸宅から早稲田南町へ人力車でときどき通って作品を見てもらっていた。里見美禰子の造型に影を落としているとすれば年齢的に姉の芳子の方であろうが、それを示す材料は何もない。しかし、漱石が『三四郎』執筆当時に〈女学生上がり〉の山手令嬢ふたりと親しく口をきいていた事実は重要である。

物集和子の回想『先生との出会い』には興味深い箇所がある<sup>24</sup>。

其の頃盛になりかけた自然派の作品を読んだりしたものか、先生は私に「あなたは何故貧乏人の事許り書くんです。貧乏人の事はあなたより外に知ってる人が沢山ある。それよりもあなたは自分の周囲のことをお書きなさい。それは誰も知らないから」と言われた。

つまり、裕福な令嬢の周囲のことなどはほとんど小説に書かれていないと、漱石は認識していたことになる。とすれば令嬢・里見美禰子の造型は、貧乏人ばかり描く当時の自然主義小説へのアンチテーゼでもあったと言える。ともあれ、女学校卒業後も〈結婚〉をせずに実家に居て自分の生き方を模索していた山手令嬢の例を、当時の漱石は平塚明子を含め少なくとも三人知っていたことになり、そのことは間違いなく美禰子の造型に反映されているであろう。

物集和子は『青鞥』からの離脱後、兄の友人の紹介で藤浪剛一という医学者と結婚した。「学者の女房というものは、主人が研究にかかりきりでさびしいこともありましたが」と言いつつも仲の良い夫婦だったという。美禰子が野々宮宗八と結婚した姿を彷彿させる。里見美禰子も物集和子も〈結婚〉に関して放任されていた所が似ている。

美禰子の〈結婚〉について考えるとときの参考に、さらにもう一人、親に勧められた〈結婚〉をした令嬢の例を見ておきたい。陸軍軍人・長岡外史の長女・磯子（1889生）である。

磯子は、広島県立女学校から1904年に華族女学校に移り、1906年8月に実業家・朝吹英二の長男・常吉と結婚した。しかし夫は翌月に、単身アメリカに留学。自伝『八十年を生きる』（1972 読売新聞社）<sup>25</sup>によれば、「留守中、何でも好きな稽古ごとをするように言われ」、英語や茶の湯を習ったという。しかし姑からは「私が本を読んだり絵を書くということが気に」いられず、嫌味を言われ続ける。まだ二十歳にもならない、〈女学生上がり〉の「妻」の姿である。翌年に夫は帰国したが、帰りの遅い夫を待ちながら、「一人で寂しく晩の食事をすませたあと、用がないまま毎晩机に向かって、習字の稽古」をする生活。それが変わったのはやはり出産（1909年）以後で、結局彼女は4男1女の「母」になる。

朝吹磯子はその後テニスプレーヤーとして活躍するが、〈結婚〉当初の彼女は、〈女学生上がり〉の妻が女学生趣味と結婚生活の折り合いをつけながら、次第に〈良妻賢母〉へと進んでいく典型的なパターンをたどっている。磯子が女学校で身に着けた趣味や教養は、お稽古ごと・習い事として機能したものの、要するに〈暇つぶし〉の道具に過ぎない。富裕な家庭の若妻には、子供ができるまでは夫の世話以外にすることがないのである。もっと社交界に出ていく〈家〉ならば事情は違ってくるが、富裕層に限らず、仕事が忙しい夫を持った中間層以上の主婦はだれでも似たような寂しさを感じていたことだろう<sup>26</sup>。妻女が働きに出ることがほとんどなかった当時、子供のいない主婦が家の中で寂しさを解消するには、趣味に没入してしまうか、舅姑の世話に忙殺されるか、使用人に混じって家事に精を出す、くらいしかなかった。

果たして、里見美禰子の〈結婚〉は朝吹磯子と似たようなものになったであろうか。

美禰子が最終的に〈結婚〉相手として選んだ男は、兄の友人だった。三四郎が見た「背のすらりと高い細面のりっぱな人」（十）がどんな男なのかはほとんど分からない。恭助の友人で、はじめ野々宮よし子の縁談相手だったのがいつのまにか美禰子の相手になり、おそらくは兄の仲介によって結ばれた。よし子が言っていた、よく知りもしない相手と美禰子は〈結婚〉したのである。

磯子や鈴音と違い、美禰子の〈結婚〉には親が介在していないし、兄が強要したとも思われない。何より美禰子がそんな受動的な〈結婚〉をするとは考えにくい。ゆえに従来から、この結婚を美禰子の積極的な意志によるものと解釈する見方が多いが、美禰子がどうしてその男を積極的に〈結婚〉相手として決めたのかについて十分に説明されてきたとは言いがたい。また、美禰子が三四郎たちの前から姿を消すための、いわば方便としてこの〈結婚〉を捉える見方も根強い。「迷羊の群れ」（1967）で三好行雄が示した、美禰子が三四郎や野々宮の居る世界を見限って、〈青春〉を〈絵〉に封じ込め、〈結婚〉という現実世界に旅立った、とするストーリーはいまだに魅力的な解釈として通用している。しかしこの場合、〈結婚〉の相手は無難であれば誰でもよかったのか、という疑問が残ってしまう。

そこで、「女学生上がり」の山手令嬢という立場の美禰子から見て、この結婚相手の男が



どんなタイプとして認識されたかを推測することで、美禰子の〈結婚〉の意味を考えたい。

まず前提として、兄・恭助の結婚が決まり、実家には居づらくなるだろう、という予期が美禰子に〈結婚〉を急がせたことは間違いないだろう。兄が当主である以上、自分は里見家の小姑で居候のような存在になってしまう。

もしすぐに結婚するのなら、手近な相手として野々宮宗八がいる。どうして野々宮ではいけなかったのか？先に述べたように、野々宮には美禰子よりも大事な〈学問〉がある。たとえ望まれて結婚しても自分だけを特別視し、〈可愛がって〉くれることは少ないだろう。「妻」となっても無知で女学生じみた自分を一人前に扱ってくれないのではないだろうか。菊人形見物のときのように寂しく屈辱的な思いはしたくない。美禰子はそのように考えたのではないか。それに学者・年長者として敬愛することはできても、〈恋愛〉とは違う。このような理由から、野々宮との〈結婚〉に踏み切れなかったのだと考える。

三四郎の場合には、〈恋愛〉から〈結婚〉に至るまでにまだまだ時間がかかる。

それでは、〈結婚〉相手に選んだ男はどうだろうか。

一つには、兄の友人だという点がポイントだと思う。兄・里見恭助の人柄についてはほとんど分からないが、一つだけそれを示すエピソードがある。原IIが、恭助と「一中節」を習っていると、広田に言う場面である。

「それでもほくはまだいいんだが、里見恭助ときたら、まるで形無しだからね。どういものかしらん。妹はあんなに器用だのに。このあいだはどうとう降参して、もう歌はやめる、その代り何か楽器を習おうと言いだしたところが、馬鹿囃子をお習いなさらないかと勧めた者があつてね。大笑いさ」  
(七)

恭助は原口と遊んでいられる身分であることが分かるが、このエピソードから透けて見えるのは里見恭助の〈人の好き〉である。決して読者から意地の悪い人間に思われぬように配慮されている。

結婚相手の男が人力車で美禰子を迎えに来たとき、「今まで待っていたけれども、あんまりおそいから迎えに来た」と言い、「はやく行こう。にいさんも待っている」(十)と促した。兄との親近性が示されていて、その言い方にもやはり〈人の好き〉が匂う。

最終章で「森の女」を見た彼は、団扇を翳したポーズを褒め、原口はそれが美禰子の要望だったと明かす。それで、「夫は細君の手柄だと聞いて左も嬉しさうである。三人のうちで一番鄭重な礼を述べたのは夫である」と書かれている。この場面は、妻と三四郎との関係を全く知らない道化者にされていると解釈することもできるが、そうであったとしても「細君の手柄」と知って「さもうれしそう」な様子を見せる夫には〈人の好き〉がにじみ出ている、とは言えるだろう。こういう夫(男)は、けっして細君に対して冷淡ではないことが示されている。

大胆に言い切れば、おそらく彼は美禰子と〈結婚〉できて、嬉しくて仕方がないのだ。原門のところへ人力車を飛ばして迎えにいったことからそれが窺える。考えてみると、彼は恭助の友達なのだから、恭助は初めから彼を妹の縁談相手にしてもよかったはずだが、そうはしなかった。おそらく恭助が野々宮の妹よし子を彼の相手として推薦した。それは多分、彼にはよし子の方がふさわしいと恭助が考えたからだ。言い換えれば、美禰子には合わないと思ったということだ。

なぜ恭助は彼が美禰子には合わないと思ったのか。これは全くの推測になるが、おそらく美禰子が気に入らないだろうと考えたからだろう。〈女学生上がり〉の、英語や美術が好きで、男以上に才気がある、気の強い妹は彼を好まないと兄・恭助は思った。

この推測が正しいとすれば、おのずと結婚相手の男のキャラクターは見えてくる。おそらく文学士や理学士ではなく恭助と同じ法学士で、学者・芸術家タイプではなく、趣味や教養もそれほどでもない、〈人が好い〉のが取り柄というお坊ちゃんタイプ。つまり里見恭助と似たタイプを想定すればいいのである。

だから彼は、よし子から断られたあとに、たぶん恭助から美禰子が縁談に応じてもいいと言っているという話を聞いて有頂天になったことであろう。

第五章で、よし子が三四郎に「兄の野々宮が好か嫌かと云ふ質問」をする場面がある。「研究心の強い学問好き」の兄は、「自分を研究して不可ない。自分を研究すればする程、自分を可愛がる度は減るのだから、妹に対して不親切になる。けれども、あの位研究好の兄が、この位自分を可愛がつて呉れるのだから、それを思ふと、兄は日本中で一番好い人に違ない」とよし子は言う。現在のよし子は兄・宗八がいちばん好きだから、兄から〈可愛がつて〉もらいたいのである。もし兄以上に好きな人ができれば、あるいは〈結婚〉してもいいと思える人ができれば、よし子はその人に〈可愛がつて〉もらおうとするだろう。よし子の言う〈可愛がつてくれる〉は、〈甘えさせてくれる〉に近い。

美禰子はもうよし子のような女学生ではないが、女学生時代を延長して生きているような山手の令嬢である。〈女学生上がり〉の美禰子は、内部の欲求と外部から受けるプレッシャーの中で常に〈結婚〉というゴールを意識しながらも、世間から浮き上がった中途半端なモラトリアム状態を楽しんでいるところがある。高いところに浮かぶ雲を眺める美禰子は、高く遠いところにあるものに手を伸ばそうというのではなく、それを眺めている〈自分〉に酔っているようにも見える。それが〈結婚〉というゴールに入ってしまうと、現在の境遇はすべて変わってしまう。〈夫〉や〈子供〉や家族・社会といったものを〈自分〉以上のものとして扱わなければならない生活が始まるのである。こういう感覚をもつ美禰子のような女性にとって、好ましい〈結婚〉とは何か。それはやはりよし子と同じように、〈自分〉をいつも〈見ていて〉くれて、〈可愛がつて〉くれる男性との〈結婚〉であろう。また、そうするだけの時間的・経済的余裕がその男にあることも重要な条件である。

美禰子が結婚相手の彼のことを、兄に似た、〈自分〉を大事にしてくれそうな余裕のある

男だと直感したとするならば、突然の〈結婚〉も、それが兄の取り持ったよし子の縁談相手であったことも理解することができる。この〈結婚〉は、彼からすれば、美人で気位の高い友人の妹をみごとに射止めた勲章であつたらうし、美禰子からすれば、愛着しつつも不安定な現在の境遇を脱して平穏な生活をもたらす切り札であつただらう。

確かにこの〈結婚〉は、美禰子の妥協の産物とも、現状からの離脱あるいは諦めを伴った逃避とも解釈できるものかもしれない。しかし、〈女学生上がり〉の〈自分〉にふさわしく〈結婚〉を直感的に選び取ったのだという解釈もまた許されるだらう。

## おわりに

もし美禰子の〈結婚〉についての小論の解釈が当たっているとするならば、美禰子が野々宮と三四郎に抱いたであらう〈罪意識〉についても説明することができる。

野々宮に対してはむろん、長い間、まるで婚約者のように振舞いながら〈結婚〉しなかったことに尽きる。推測の通りならば、美禰子の〈結婚〉は言わば〈自分可愛さ〉の結果である。〈自分〉を大事にしてくれそうな男に嫁いだ、ということだ。野々宮のような立派な学者を支える「良妻」に、美禰子はなろうとはしなかった。最後に野々宮が美禰子の結婚式の招待状を引きちぎる行為はそれに対する小さな憂さ晴らしであつたらう。

三四郎に対しては、〈恋愛〉からの敵前逃亡の罪といえるだらう。〈偶然の目撃者〉として三四郎を意識してから、思わせぶりの態度でいつも〈自分〉を〈見てくれる〉ように仕向けておいて、〈恋愛〉の入り口あたりで突き放してしまった。野々宮と違い、知り合ったばかりの三四郎とは〈恋愛〉を喚起する刺激があり、時間をかければ〈結婚〉まで見えたかもしれないが、ゴールを急いでしまった。また三四郎とならば、世間の〈眼〉を跳ね返すような〈男女交際〉や〈自由恋愛〉の道が探れたのかもしれないが、その芽を摘んでしまった。三四郎が本気で〈恋愛〉を意識して原口のアトリエに会いにきたとき、自分はすでに〈結婚〉を決めていた。最後に教会の前で呟いた聖書の言葉は、それに対する謝罪である。

兄の恭助が結婚すると聞いたとき、美禰子はすぐに家を出ることを考え、その最も手近な方法が〈結婚〉だったことはまず間違いないだらう。だから拙速に結婚相手を決めてしまったように見えるが、もしその決断に、その男でなければならぬという必然性があるとするならばどんな理由が考えられるのか、以上のような推測を行なってみた。賢い美禰子のことだから、結婚後も〈女学生上がり〉の「奥様」として如才なく生きていくことだらう。

末尾において、「森の女」の絵の前で「<sup>ストレイ・シープ</sup>迷羊」という言葉を呪文のように唱える三四郎は、美禰子の呪縛から永遠に逃れられないかのように見える。しかし、三四郎が唱えているのは〈絵〉の中的美禰子に対してである。それは大学の池で初めて見た美禰子であり、

つまり三四郎が〈囚われた〉瞬間の美禰子である。まだ名前も素性も知らない状態で〈恋〉に落ちた三四郎を見透かしたように、美禰子はその時の〈自分〉を〈絵〉に残し、後からその〈絵〉に〈謎〉という形で題名を付けた。〈自分〉は「迷子＝ストレイ・シープ」である、と。三四郎はその言葉を唱えることで出会いの瞬間に戻ろうとしている。

「ストレイ・シープ」についての前述の解釈が当たっているかどうかは分からない。しかしこれは、三四郎と美禰子の二人だけに通じる符牒・暗号・サインであることに間違いはない。最後に三四郎は、二人だけに通じる符牒で、二人だけに意味のあるポーズで立つ〈絵〉の中の美禰子に一生懸命語りかけている。発展し、成就することのなかった〈恋愛〉の幻影を追いながら……。

(2011年11月16日稿)

#### 〈注解〉

- 1 二人の心中行は3月21日。23日、塩原の峠を彷徨、24日に捜索中の警官に発見され下山した。新聞をにぎわせたのは、25日・26日。
- 2 『平塚らいてう自伝 元始、女性は太陽であった 上巻』(1971 大月書店)。以降の、らいてう平塚明子に関する記述は、これを元にしてている。
- 3 前記『元始、女性は太陽であった』には、事件直後の母との会話に、「あんたは家へはもう帰れないでしょう、お父さんが家へいれないとおっしゃったら、一体どうするつもり。」／「心配しないで下さい。先生でも、速記者でも、なんにでもなりますから……。。」／「だれが男のひとと家出したような女を使ってくれますか、あんたはほんとに世間知らずね。」、とある。
- 4 前記自伝に、「四十年の早春のころ」、「まだ雲水のような純粋な感じのこの青年僧に、不意になんのためらいもなく接吻をしてしまったのです」、とある。
- 5 前記自伝には「成美女子英語学校」とあり、「ユニヴァサリストという教会付属の学校」で「女学校卒業者が中心」であったという。『現代女学生宝鑑』(1906 東京堂書店)によれば、「英語部」「技芸部」をもつ「本科三年、予科二年」の女学校で、「麴町区飯田町四丁目」にあった。
- 6 この当時はまだ制度上の〈女子大学〉は存在しない。日本女子大学校も高等女学校の上位にあたる〈専門学校〉であった。また、早稲田大学や明治大学のような私立大学もまだ〈専門学校〉だった。
- 7 美禰子が「独身」であることについては、村瀬士朗が「里見家の戸主の相次ぐ死というアクシデントによる〈家〉の事情の結果にすぎない」と述べている(1998・9アエラムック『漱石がわかる。』)。
- 8 佐伯順子『「色」と「愛」の比較文化史』(1998 岩波書店、のち2010 岩波人文書セレクション)、同『恋愛の起源』(2000 日本経済新聞社)参照。
- 9 この序文の続きに、「『青春』秋之巻の執筆捗取らずして、同書発行の気を失したる為め、其の間の楔として書肆の求むるまゝ、期日と紙数との或る制限内に勿卒筆を走らせしは此篇なり」、とある。
- 10 1907年7月～9月、「万朝報」に連載。以降の引用は、国立国会図書館HPの「近代デジタルライブラリー」による。『露』は、小坂晋『漱石の愛と文学』(1974 講談社)でも大きく取り上げられているが、漱石と楠緒子との濃密な関係を証拠だてるために利用されているきらいがある。なお、この作品は1999年にゆまに書房から「近代女性作家精選集 2」として復刻されている。
- 11 『空薫』は楠緒子の病気により一旦中絶後、翌年再開された(1909年5月～6月)。
- 12 成田龍一『大正デモクラシー』〈シリーズ日本近現代史4〉(2007 岩波新書)。

- 13 斎藤美奈子『モダンガール論』(2003 文春文庫。もとは、2000 マガジンハウス刊)。
- 14 大塚楠緒子が明治女学校に通っていたのは、1896(明治29)年頃で、2月に麹町下六番町の校舎が焼け、仮校舎のあと、1897年に巣鴨へ移転したところである。
- 15 拙稿『「三四郎」論—「命の根」が揺らぐとき—』(2011・3 「共立 国際研究」第28号)参照。
- 16 『空薫』のヒロイン雛江は、「仙台の高等女学校を卒業してから東京へ出て、それぞれ専門の師に就て和漢洋の学を、深いといふより寧ろ博く学ぼうちに」、「追々学才を世間に認められるようになり、殊に容貌の麗はしいのが人目に立つて」と書かれている(1908・5・6 第10回)。
- 17 大塚楠緒子は、中島益吉『名媛の学生時代』(1907 読売新聞社)にあるインタビュー記事で、「今日の所、女子として世間向きの好いのは、高等女学校卒業位の程度でございませう。当時の男の方々の要求は、決して夫以上では無いのでございませう、それ以上となつては、男の方が持て余されるのだそうでございませう」と述べている。
- 18 もちろん「生意気」を非難する意見ばかりではない。『青鞥』創刊の産婆役ともなった生田長江は、塩原事件後に次のように書いている。「どうも小説でもかいて見やう、脚本でも作つて見やうと云ふ婦人に、世俗の標準から見て、生意気でなく、跳返りでない人のあるべき筈がない。生意気も結構、跳返りも結構である。たゞ、その飽くまでも婦人としての立場を忘れないことを必要とする。」(「閑秀作家に望む」(1908・7 「女子文壇」))。しかし、津田青楓『漱石と十弟子』には、「高が女学生ぢやないか。なんとか老師に参禅したとかなんとか云ふちよるが、親爺でも分らんよ。乳くさい少女が生意気だよ」と、らいてうを評する鈴木三重吉のことが出ていて、当時の一般的な空気を代表している。
- 19 斎藤美奈子「旧作異聞②」(2006・1 「WB」)。
- 20 前出の本田和子『女学生の系譜』や稲垣恭子『女学校と女学生—教養・たしなみ・モダン文化』(2007 中公新書)等を参照。
- 21 この展覧会は1908年5月に太平洋画会が上野で開催したものがモデル。ヴェニスの絵を描いた兄妹は、吉田博・ふじを。実は義兄妹で、このあと結婚している。安永幸一『山と水の画家吉田博』(2009 弦書房)に詳しい。東京朝日新聞(1908・5・25)の「展覧会瞥見」という記事に、「入場第一に眼に付くのは吉田フジヲ女史と同博氏の写生旅行成績だ、フジヲ女史の水彩画は総て色彩が鮮明で何処となく明瞭としてゐる」、「ヴェニスの写生は稍成功してゐる」等とある。
- 22 これについては、野々宮もこのポーズの〈目撃者〉だったとする解釈があるが、取らない。
- 23 森まゆみ『断髪のコットンガール —42人の大正快女伝』(2008 文藝春秋)。
- 24 『名著複刻 漱石文学館 解説』(1975 日本近代文学館)所収。
- 25 もとは、1969年に朝吹登水子刊。
- 26 『それから』の梅子がこのタイプの夫人である。

## Satomi Mineko : *A Stray Sheep* who Graduated Girls' School

Toshiki Hashikawa

This paper is about Satomi Mineko, the heroine of Natsume Soseki's novel "Sanshiro." Mineko calls herself 'a lost child' or 'a stray sheep.' Around 1908, the year the novel was written, the girls who received higher education like girls' school were rare. And few of 'graduates of girls' school' adopted professions, many of them simply spent moratorium period before marriage. In this paper, I considered what did these high-educated women like Mineko think in choosing their husbands, while they drew attention from people about when they would marry? Ogawa Sanshiro, the leading character of this novel who is a student of Tokyo Imperial University, and Nonomiya Souhachi, a lecturer of physics, were candidates for Mineko's husband. But, in the end, Mineko chose neither of them and married another man. Why did she choose that man instead of them? I considered about her real reason, too.

Schoolgirls and high-educated women of these days were often criticized for being 'proud' or 'impudent' from journalism and the world. What way of life did the unmarried women who awoke to 'individual' seek those days? I took Hiratsuka Raicho and other women as an example and compared their way of life with Mineko's.